

TOP INTERVIEW

求められるのは、  
遊び心・センス・クリエイティブ  
これからの日本は「面白いこと」が仕事になる。

**TOMOTAKA TAKAHASHI**

高橋 智隆

2009年8月、フランス ル・マンのサーキットでパナソニック製のアルカリ乾電池「E.VOLTA」2本を動力源に、1体のロボットが23.726km・24時間走行に成功し、ギネス世界記録を達成したことは記憶に新しい。このロボットの「エボルタ」君の生みの親が、株式会社ロボ・ガレージ代表取締役社長を務めるロボットクリエイターの高橋智隆氏である。今や売れっ子のロボットクリエイターである同氏に、自身のキャリアについて伺った。

## 趣味で作ったロボットから起業へ

代表作「クロイノ」が米TIME誌で「最もクールな発明」に選ばれたほか、本人もサイエンスポピュラー誌で「未来を変える33人」に取り上げられるなど、新進気鋭の技術者として世界的に注目を集める高橋氏だが、実は最初は理系ではなく、文系の立命館大学産業社会学部に内部進学した経歴を持つ。

「僕が高校生のころはまだバブルで、理系を出ても銀行や証券会社に就職する人が多かった。仕事は仕事、趣味は趣味と割り切って、だったら文系でもいいかなと。結局バブルがはじけて、好きなモノづくりを仕事にしたいと思うようになりました」

リールの仕組みが好きで、立命館大学時代に志望していたのは、釣具メーカー。文系だが、企画や開発などクリエイティブな仕事に就きたいと考えていたという。就職活動では3〜4社しか受けず、あえなく第一志望の選考で失敗。モノづくりの究極と感じたロボットの道に進もうと、1年予備校に通った後、京都大学工学部への進学を決める。

入学当初は、漠然と「メーカーに入社して、ロボットを作る部署でエンジニアとして働く」イメージを持っていったという高橋氏。しかし、転機はすぐに訪れる。ガンプラの「ザク」を改造し、趣味で作った二足歩行型ロボットを大学の特許相談室に持ち込んだところ、予想以上の評価をもらうことに。当時、産学連携やロボットブームが一段と過熱し始めた時期でもあった。とんとん拍子に周りからの支援を受

け、京都大学のインキュベーション施設に入居第一号として事務所を構えるまでになる。「失敗したら普通に就職すればいい」と、京大卒業時に「ロボ・ガレージ」を創業。在学中に今の仕事の原型ができたのは、「ほとんど成り行き」と高橋氏は振り返る。

## 自分の価値観を追求することで、 ビジネスの独創性が生まれる

会社とはいつでも、社員はゼロ。メーカーや大学の教授らと協力して一つのプロジェクトを担当することもあるが、基本的には、ロボットの基本設計・デザイン・製造はすべて高橋氏が1人で行っている。

「大勢で作れば総合的にバランスの良いものができるけど、その反面、無難なものにまとまってしまう可能性も高い。自分の価値観で作った方が、純粋に面白いものができる。結果として、同じ価値観を持った人に共感してもらえろ」というのが高橋氏の考えだ。スタイリッシュなフォルムに、愛嬌のある表情、スマートな動作――。自らの活動を「サイエンスアート」と表現するように、高橋氏の手掛けるロボットは、これまで企業が手掛けてきたような無機質で不格好なロボットのイメージを大きく覆した。「救助や介護など、最初から機能性・実用性・安全性が求められるロボットを目指しても、それはあまり現実的ではありません。まずは世の中に普及させることが重要。携帯電話のように、一般の人々に広まっていく過程でより良いロボットが開発され、

さまざまな機能や活用が生まれてくると思うんです」。そのためには、誰もが欲しいと思える外観を備えたロボットを作ることが先決だと、高橋氏は主張する。

## 技術だけでは人間とロボットの未来は 進展しない

将来的には、人間と機械とのコミュニケーションをヒューマノイドロボットが担うことも夢ではない





かもしれない」。高橋氏は、「一家に1台ロボットの「ある生活」を将来的なビジョンとして掲げる。例えば、空調・照明・セキュリティなど、家のあらゆる機能がシステム化される。家にはヒューマノイドロボットがいて、ユーザーのライフスタイルを把握した上で、例えば留守のタイミングを見計らって掃除ロボットを起動したり、セキュリティの管理を行う。一つ一つの作業は各機械が実行するが、それらを集中コントロールするインターフェースとしてヒューマノイドロボットが機能するとうわけだ。

「もちろん、私が手掛ける部分だけで完結するものではありません。ただ、ヒューマノイドロボットのインターフェースになれば、相当面白いことがで

きる。私がロボットクリエイターとしてやるべきことは、そういった人間とロボットの未来の可能性を見せていくところにあると考えています」

単純に、音声認識ができて言葉が話せれば人間との流ちょうなコミュニケーションが可能になるかというところ、決してそうではない。人間のコミュニケーションを突き詰めていくと、目線の動きや瞬き、細かい仕草など、非言語的な要素によるところも大きい。高橋氏が目標とする「誰もがちゅうちょなくコミュニケーションを取ろうと思える存在感」を実現するためには、人手を介して人間のコミュニケーションそのものを研究し、ロボットの外観、動作、コミュニケーションまでをうまくデザインしていかなくてはならない。取り組むべき課題はまだ多いと言えるだろう。

### 個人のセンスや遊び心が仕事の付加価値に

常に数本のプロジェクトを抱え、国内外のメディアにも取り上げられるなど、売れっ子のロボットクリエイターとして活躍する高橋氏。作品のクオリティのほかに、仕事の上で気遣っているのが、ロボットの「見せ方」だ。

以前に比べれば技術が進歩したとはいえ、ロボットの性能は不十分な面も多い。「頻繁に失敗するようなデモンストレーションではロボットの魅力が伝わらない」。特にビジネスにおいては、「余計なところで不細工に見えないように、環境側でも補う必要

がある」と、高橋氏は細心の注意を払う。

「例えば、レクサスだって、ふかふかのじゅうたんに敷いてある立派なショールームに展示されているし、エルメスやルイ・ヴィトンのバッグも、豪華なディスプレイや照明、教育されたスタッフが居るから、数十万という値段に見合っている気がする。これが、ディスプレイショップの棚に並んでいるら、購買意欲は下がりますよね。ロボットも一緒で、付加価値を感じてもらうためには、ブランディングが大切なんです」

それを踏まえて、高橋氏は「これからの日本には、『ロボットクリエイター』のような付加価値を高める仕事が増えていく」と指摘する。70年代の高度成長期を経て、モノづくりで成長を遂げてきた日本では、「良いモノを安くたくさん作る」という文化の下、組織においては「まじめにコツコツ働く人」が評価されてきた。しかし、大量生産の拠点が中国をはじめとする海外にシフトしていく中で、必要とされる人材像にも変化が生じてきている。今まではただ一生懸命に働いていれば会社も産業も成長したが、これからはそうもいかない。

「今後の日本を担う人材に求められるのは、遊び心・センス・クリエイティビティです。そういう人が面白いことを考えて、それが産業になっていく。『ツイッター』や『世界カメラ』といった新しいサービスも、それ自体は遊びみたいなもので、必要不可欠ではありませんよね。でも、それに賛同する人がたくさん居て、世の中に経済効果をもたらしてい

る。「ロボットクリエイター」というのは僕が考えた仕事ですが、最近テレビなんかでもよく耳にする「アートディレクター」や「ハイパーメディアクリエイター」など、個人のセンスを売り物にするような職業がこれからは増えていくのではないのでしょうか」

高橋氏によれば、こういったタイプの産業が成り立つのは、「経済的な豊かさ」があればこそ。また、産業が成熟し、モノが飽和している先進国においては、いや応なしに付加価値を高めることに活路を見出さなければならない実情もある。「付加価値を創る」という仕事こそ、まさに今後の日本を象徴しているのかもしれない。

### 「その他大勢から抜け出さなければ、意味がない」

ロボットのほかには、自動車や時計などの工業製品が好きで、「とにかくモノフェチ」だという高橋氏。人一倍所有欲が強く、買い物に行つて欲しいものがないとむしろ不安になるほど。それだけに、今のゆとり教育世代の学生には違和感を持つことも多い。

「今の学生は野望や欲望がなさ過ぎる。もうからなくていい、出世しなくていい、結婚しなくてもいい。何を言っても無欲というか。海外の学生は、もっと押し上がってやろうというエネルギーがありますよ。このままでは、彼らが社会人になるころには、

日本はさらにもう一段落ちますね」

そんな状況を危惧しつつ、高橋氏はこれから就職活動をする学生に対してこうアドバイスする。

「何となく興味がわくものがあれば、まずは行動を起こしてみた方がいい。学生じゃないとできないことも結構ありますから。例えば、インターンシップなんかもその一つ。普通のオッサンが会社訪ねて来ても追い出されるけど、学生なら試しに働かせてもらえるわけです（笑）。学生の特権を利用しない手はないでしょう」

学生向けのビジネスコンテストや技術アイデアコンテストなどは社会人向けより敷居が低く、学生にはさまざまなチャンスが待ち受けている。学生の時のちよっとした行動で道が開け、意外な転機につながることもあってあり得る。実際に高橋氏自身も、京都大学時代にこうしたコンテストでの優勝も動機となり、起業に踏み切ったからこそ現在の自分があるという。

「どこかで何かしら行動を起こさないと、一生その他大勢に埋もれ続けたままになってしまうかもしれない。このご時勢だからこそ、意外に頭一つ抜けるのは簡単ですよ。ぜひ皆さんには、無欲な集団から抜け出して、輝かしい未来を実現してもらいたいと思います」

## 高橋 智隆（たかはし・ともたか）

1975年生まれ。

ロボットクリエイターとしてロボットの開発・設計・デザイン・製作・発表を行う。1998年立命館大学産業社会学部卒業、翌年京都大学工学部に入學。2003年卒業と同時に『ロボ・ガレージ』を起業。代表作に「ロビッド」「クローン」「FT」「エボルタ」など。ロボカップ世界大会5年連続優勝、NBK学生ベンチャー大賞、関西テクノアイデアコンテストグランプリ、キャンパスベンチャーグランプリOSAKAなどを受賞。現在、(株)ロボ・ガレージ代表取締役社長、東京大学先端研特任准教授、福山大学・大阪電気通信大学客員教授を兼任。

